

エレミヤ書44-46章 「世に戻っても・・・」

1A 主の名を唱えない民 44

1B 同じ物差し 1-14

2B ご利益宗教 15-23

3B 不可能な帰還 24-30

2A 命の分捕り物 45

3A エジプトへの復讐 46

1B 敗走する軍隊 1-12

2B 侵略するバビロン 13-24

3B 捕囚からの救い 25-28

本文

エレミヤ書 44 章を開きましょう。私たちの学びは、ついにエレミヤのユダヤ人に対する預言の最後になります。45 章はバルク個人に対して、そして 46 章以降は諸国への民に対する預言になります。

1A 主の名を唱えない民 44

1B 同じ物差し 1-14

44:1 エジプトの国に住むすべてのユダヤ人、すなわちミグドル、タフパヌヘス、ノフ、およびパテロス地方に住む者たちについて、エレミヤにあったみことばは、次のとおりである。

エレミヤが、愛する同胞の民に語った最後の預言となります。彼らは今、エジプトにいます。

前回のことを思い出してください、バビロン捕囚によってユダの町々やエルサレムが破壊されて、その後で僅かに残った民が、バビロンによって任命されたゲダルヤを中心に、小さな共同体を作りました。ところが、ゲダルヤがイシュマエルという男によって暗殺されて、そのユダヤ人たちを誘拐します。それで今度は将校ヨハナンが、イシュマエルからユダヤ人たちを奪い返します。そして、バビロンの任じたゲダルヤをユダヤ人が殺したのですから、バビロンが自分たちを殺すのではないかと恐れて、エジプトに下ることに決めました。エレミヤに、主の御心を伺ったのですが、主は、「留まりなさい、バビロンは悪いことはしない。あなたがたを救う。しかし、あなたがたは言うことを聞かない。」と言われたのです。事実、彼らは主に伺ったといっても、既に心はエジプトに下ることに決めていたのです。そして彼らは、タフパヌヘスという、エジプトの入口に当たる要塞の町で、エレミヤからの神の言葉を聞きます。彼らはバビロンを恐れてエジプトに下りましたが、このエジプトにまでネブカデネザルが下ってきて、エジプトの国を打つというのです。ですから、逃げてきたつもりが、実は破滅のほうに自ら向かっていったということです。そういうことで今、彼らはエジプトに滞

在しています。

その場所は、エジプト全域に広がっています。タフパヌヘスは、今のスエズあたりにあります。エミグドルはその東に隣接する、エジプト国境の町です。ノフはメンフィスとも呼ばれ、ナイル川沿いの町ですが、この三つは下エジプトと呼ばれてエジプトの下流地域です。そしてパテロス地方は、ナイル川の上流にある地域で、上エジプトと呼ばれます。ですから、エジプトの北部から南部までユダヤ人がその全域に住んでいたことが、ここから分かります。この中で、「ミグドル」という町の名が出てきたことは、心を重くさせます。かつてイスラエルの民は、このミグドル辺りに宿営して、神が紅海を分けさせてくださった、まさにエジプトを出て行った町だからです(出エジプト 14:1)。

前回学びましたように、カナンの地に住んでいるイスラエル人にとって、エジプトはいつも豊かさ
と賢さ、そして力においての誘惑でした。アブラハムが飢饉の時にエジプトに下り、肉の欲望の
生々しい姿に出会ったところから始まって、ソロモンはそこから嫁をもらい、馬を大量に購入、そし
て王国時代は北から攻めてくるものがあれば、主に拠り頼まず、エジプトを期待しました。そして彼
らはバビロンを恐れて、エジプトに避難したのです。一時期、そこに戻ればよいではないか？と思
うかもしれません。しかし、主は知っておられました。物理的にエジプトに行くだけでなく、心もエジ
プトになってしまったユダヤ人の姿を見ます。紅海が分かれ、そこを通ったのは水のバプテスマを
表していますが、彼らは自分たちが古い人に死に、新しい人として生きる体験をしたのに、後戻り
してしまったのです。

44:2 「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『あなたがたは、わたしがエルサレムとユダ
のすべての町に下したあのすべてのわざわいを見た。見よ。それらはきょう、廃墟となって、そこに
住む者もない。44:3 それは、彼らが悪を行なってわたしの怒りを引き起こし、彼ら自身も、あなた
がたも先祖も知らなかったほかの神々のところに行き、香をたいて仕えたためだ。44:4 それでわ
たしはあなたがたに、わたしのしもべであるすべての預言者たちを早くからたびたび送り、どうか、
わたしの憎むこの忌みきらうべきことを行なわないように、と言ったのに、44:5 彼らは聞かず、耳
も傾けず、ほかの神々に香をたいて、その悪から立ち返らなかった。44:6 それで、わたしの憤りと
怒りが、ユダの町々とエルサレムのちまたに注がれて燃え上がり、それらは今日のように廃墟と
なり荒れ果ててしまった。』

エルサレムでなぜバビロンが攻めてきたのか、その教訓をはっきりさせています。彼らは、エル
サレムが廃墟になったという災いのみを目を留めていたかもしれないからです。それが、何で起こ
ったのかということは顧みないでいた可能性があります。そこではっきりと、エレミヤは、分かり易く、
それは彼らが神の憎まれる神々に仕えていたからだ、そして悔い改めなかったからだ、と言いま
した。そして主は、エレミヤを始め、他にも預言者をたくさん送って、彼らに語り聞かせました。で
すから、彼らは「聞いていなかった」ということは言えないのです。

44:7 それで今、イスラエルの神、万軍の神、主は、こう仰せられる。『あなたがたは自分自身に大きなわざわいを招こうとしているのか。なぜユダの中から男も女も、幼子も乳飲み子も断ち、残りの者を生かしておかないようにするのか。44:8 なぜ、あなたがたの手のわざによってわたしの怒りを引き起こし、寄留しに来たエジプトの国でも、ほかの神々に香をたき、あなたがた自身を断ち滅ぼし、地のすべての国の中で、ののしりとなり、そしりとなろうとするのか。44:9 あなたがたは、ユダの国とエルサレムのちまたで行なったあなたがたの先祖の悪、ユダの王たちの悪、王妃たちの悪、あなたがたの悪、妻たちの悪を忘れたのか。44:10 彼らは今日まで心碎かれず、恐れず、わたしがあなたがたとあなたがたの先祖の前に与えたわたしの律法と定めに歩まなかった。』

エジプトにおいても、同じ偶像礼拝の罪を彼らは犯していました。ここで「男も女」「王妃たちの悪」「妻たちの悪」と女たちの悪も強調していますね。これは、女たちが率先して偶像礼拝の慣わしを行っていたからです。

44:11 それゆえ、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『見よ。わたしは、わたしの顔をあなたがたからそむけて、わざわいを下し、ユダのすべての民を断ち滅ぼそう。44:12 わたしは、寄留しにエジプトの国へ行こうと決心したユダの残りの者を取り除く。彼らはみな、エジプトの国で、剣とききんに倒れて滅びる。身分の低い者も高い者もみな、剣とききんで死に、のろい、恐怖、ののしり、そしりとなる。44:13 わたしは、エルサレムを罰したと同じように、エジプトの国に住んでいる者たちを、剣とききんと疫病で罰する。44:14 エジプトの国に来てそこに寄留しているユダの残りの者のうち、のがれて生き残る者、帰って行って住みたいと願っているユダの地へ帰れる者はいない。ただのがれる者だけが帰れよう。』

「寄留しにエジプトの国へ行こうと決心した」とあることに注目してください。エジプトに下った人は「寄留しよう」と考えていました。つまり、いつかバビロンが倒されるか、何かが起こった時にユダの地に帰ろうと思っていました。けれども、エレミヤは「帰れる者はいない」と言います。わずかに残った避難民だけが帰りますが、ほぼ全員、エジプトの中で、かつてエルサレムの住民が味わった恐怖を体験すると預言しています。彼らは災いを免れるために、物理的に移動すればよいと思っていました。いいえ、災いから救われるのは、「主との関係そのもの」にあります。

2B ご利益宗教 15-23

44:15 すると、自分たちの妻がほかの神々に香をたいていることを知っているすべての男たちと、大集団をなしてそばに立っているすべての女たち、すなわち、エジプトの国とパテロスに住むすべての民は、エレミヤに答えて言った。44:16 「あなたが主の御名によって私たちに語ったことばに、私たちは従うわけにはいかない。44:17 私たちは、私たちの口から出たことばをみな必ず行なって、私たちも、先祖たちも、私たちの王たちも、首長たちも、ユダの町々やエルサレムのちまたで行なっていたように、天の女王にいけにえをささげ、それに注ぎのぶどう酒を注ぎたい。私たちはその時、パンに飽き足り、しあわせでわざわいに会わなかったから。44:18 私たちが天の女王に

いけにえをささげ、それに注ぎのぶどう酒を注ぐのをやめた時から、私たちは万事に不足し、剣とききんに滅ぼされた。」

すごいことを彼らは言いました。平然と自分たちが主に従わないことを発言しています。これは、はっきりとした信仰を捨てたこと表明です。かつて彼らはエジプトに下ろうとしていた時に、エレミヤに主の御心を求めました。エジプトに下るなという神の言葉を彼らが聞いた時に、彼らは激しく反発しましたが、それでも、表向きでも主の御名を呼び求めることはしたのです。ここでは、完全にヤハウエ信仰を捨てています。彼らに何が起こったのでしょうか？「開き直り」でしょう。罪を犯して引け目は感じていたところが、もう罪に慣れ親しんで、自分は悔い改めることもしないだろうと考え、「私にはヤハウエは要りません」と開き直ったのです。

彼らの発言の中で注目すべきは、「災いは、天の女王にいけにえをささげるのを止めた時から起こった」とするものです。これはおそらくヨシヤの宗教改革のことを指しているのでしょう。ヨシヤがアシェラの像や祭壇をことごとく破壊しました。ヒゼキヤの子マナセが導入したものです。ヨシヤの死後、再びこれらの行ないを始め、それが原因でエルサレム破壊を招きました。けれども彼らは、ヨシヤが破壊したから、これらの災いが来たと言い張っています。このように、罪を犯し、その中にずっと浸っていると、自分の過去の記憶さえ歪めます。今、自分に降りかかっている災難は、自分の罪によるものではなく、自分が神やキリストに関わったから起こったことだとみなすのです。エジプトから出てきたイスラエル人のことを思い出してください、エジプトの食生活がいかに豊かであったかを懐かしがっていますが、自分たちがエジプト人によってどんな酷い仕打ちを受けていたかはすっかり忘れていてるのです。

そして、ここに出てくる彼らの拝んでいた偶像の名前が「天の女王」です。エレミヤ書7章13節にも出てきましたが、古代のさまざまな地域において女神の称号として使われていたものでした。愛と性、豊穡を表した神です。バビロンから始まります、「イシュタル」です。エジプトでは「イシス」と呼ばれました。ギリシヤ世界にも「アフロディテ(Aphrodite)」という女神がいますね。そしてローマではあの有名な「ビーナス」です。そしてカナン人は「アシュタロテ」を拝み、また「アシェラ」を拝んでいました。おそらくエジプトにいるユダヤ人は「アシュタロテ」あるいは「アシェラ」を持ち込んで、拝んでいたと思われます。そして、不思議なことに世界にある宗教に、天の女王が出てきます。男性であるはずの仏陀は、日本では「観音」として女性化しています。日本を象徴するカミは天照大神ですね、女神です。そしてキリスト教において、ローマ・カトリックがマリヤを伝統的に「天の女王(Queen of Heaven)」と呼んでいます。そして黙示録17章には、大淫婦の女として大バビロンの都が出てきます。富と力、そして偶像礼拝の象徴です。

44:19 「私たち女が、天の女王にいけにえをささげ、それに注ぎのぶどう酒を注ぐとき、女王にかたどった供えのパン菓子を作り、注ぎのぶどう酒を注いだのは、私たちの夫と相談せずにしたことでしょうか。」

女たちが率先して天の女王にいけにえを捧げていました。パン菓子も作っていると言っています。しばしばクリスマスはバビロン宗教の影響があると言われますが、クリスマス・ケーキももしかしたらその名残なのかもしれません。大事なのは、女たちが相談をせずにこれらのことを行なったのではないと言っていることです。民数記 20 章 7 節に、「夫がそれを聞き、聞いた日に彼女に何も言わなければ、彼女の誓願は有効である。」とあります。夫たちの同意があつてこそその女たちの行為であり、「女たちが勝手に行なった」ということではなく、夫が責任を持ちます。

44:20 そこでエレミヤは、男女のすべての民と、彼に口答えしたすべての民に語って言った。
44:21 「ユダの町々やエルサレムのちまたで、あなたがたや、あなたがたの先祖や、王たちや、首長たち、それに一般の人々がいけにえをささげたことを主は覚え、心に思い浮かべられたのではないか。44:22 主は、あなたがたの悪い行ない、あなたがたが行なったあの忌みきらうべきことのために、もう耐えられず、それであなたがたの国は今日のように、住む者もなく、廃墟となり、恐怖、ののしりとなった。44:23 あなたがたがいけにえをささげ、主に罪を犯して、主の御声に聞き従わず、主の律法と定めとあかちに歩まなかったために、あなたがたに、このわざわいが今日のように来たのだ。」

まるでこれは、私たち自身の肉と、主の聖なる言葉のやりとりのようであります。私たちの肉やわがままな思いでは、記憶でさえ変えてしまおうとする罪の力が働きます。「主に仕えようと思ってから、いろいろ悪いことが起こって来た。」と。けれども、主の聖なる言葉は真実を教えます、「あなたが主に仕えることをやめて、生活がおかしくなったのだ。」と教えます。エレミヤは、彼らの過ちを正しました。そしてはっきりと言います。

3B 不可能な帰還 24-30

44:24 ついで、エレミヤは、すべての民、すべての女に言った。「エジプトの国にいるすべてのユダの人々よ。主のことばを聞け。44:25 イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『あなたがたとあなたがたの妻は、自分たちの口で約束したことをその手で果たせ。あなたがたは、私たちは天の女王にいけにえをささげ、それに注ぎのぶどう酒を注ごうと誓った誓願を、必ず実行すると言っている。では、あなたがたの誓願を確かに果たし、あなたがたの誓願を必ず実行せよ。』

これは、「そのままにされる」という主の働きです。もちろん命令ではありません。主が「そんなに行いたいなら、その通りにしなさい」と言われているのです。主は、私たちに対してご自分のもとに帰ってくるように強く促されますが、もし私たちがそれをはっきりと断るなら、ある時点でこのように明け渡されます。そして私たちが、自分たちの行ないの結果を自分たちで刈り取るままにさせます。

44:26 それゆえ、エジプトの国に住むすべてのユダの人々。主のことばを聞け。『見よ。わたしはわたしの偉大な名によって誓う。主は仰せられる。エジプトの全土において、神である主は生きておられると言って、わたしの名がユダヤ人の口になえられることはもうなくなる。』

これは悲劇です。神に選ばれた、契約の民がまるで神を知らない異邦人になってしまうという出来事です。

44:27 見よ。わたしは彼らを見張っている。わざわざのためであって、幸いのためではない。エジプトの国にいるすべてのユダヤ人は、剣とききんによって、ついには滅び絶える。44:28 剣をのがれる少数の者だけが、エジプトの国からユダの国に帰る。こうして、エジプトの国に来て寄留しているユダの残りの者たちはみな、わたしのと彼らのと、どちらのことばが成就するかを知る。44:29 これがあなたがたへのしるしである。・・主の御告げ。・・わたしはこの所であなたがたを罰する。それは、あなたがたにわざわざを下すというわたしのことばは必ず成就することをあなたがたが知るためである。』

ここに神の憐れみがあります。神は彼らのご自分の名を唱えなくても、それでも見張っておられます。そして後に僅かに残った者たちに対して、ご自分の言葉の真実を明らかにさせて、彼らが神を知ることができるようにする、というものです。神は彼らをあきらめません、見捨てません。

44:30 主はこう仰せられる。『見よ。わたしは、ユダの王ゼデキヤを、そのいのちをねらっていた彼の敵、バビロンの王ネブカデザルの手に渡したように、エジプトの王パロ・ホフラをその敵の手、そのいのちをねらう者たちの手に渡す。』

なぜエジプトがバビロンに渡されるかと言いますと、パロであるホフラがバビロンに反逆したからです。彼が、ゼデキヤがバビロンにはむかうために応援した人物です。ホフラがエジプトから出てきて、それでバビロンがエルサレム包囲を一時解除しました。その時は何も起こりませんでした。紀元前 567 年頃、ちょうどバビロンがエジプトに侵攻してきた時、彼は自分の家臣である將軍アマシスによって殺されます。ここまでがエレミヤのユダの民に対する預言です。

2A 命の分捕り物 45

45:1 ネリヤの子バルクが、ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第四年に、エレミヤの口述によってこれらのことばを書物に書いたときに、預言者エレミヤが彼に語ったことばは、こうである。45:2 「バルクよ。イスラエルの神、主は、あなたについてこう仰せられる。45:3 あなたは言った。『ああ、哀れなこの私。主は私の痛みに悲しみを加えられた。私は嘆きで疲れ果て、いこいもない。』45:4 あなたが主にこう言うので、主はこう仰せられる。『見よ。わたしは自分が建てた物を自分でこわし、わたしが植えた物を自分で引き抜く。この全土をそうする。45:5 あなたは、自分のために大きなことを求めるのか。求めるな。見よ。わたしがすべての肉なる者に、わざわざを下すからだ。・・主の御告げ。・・しかし、わたしは、あなたの行くどんな所でも、あなたのいのちを分捕り物としてあなたに与える。』

ユダの民に対する預言を語った後、諸国の民に対する預言を行なう前に、エレミヤにいつも同伴

して、彼の預言を書いていたバルク個人に対して主が語られます。ただ書きとめると言っても、どれだけ大変な霊的な務めなのかは、午前礼拝でお話したとおりです。ただ、これで次の章が全く新しいものになるということではなく、実は始まりでもあります。それは 1 節にある、バルクに語られた時期です。「エホヤキムの第四年」で、紀元前 605 年です。この年が、次の 46 章 2 節にあるように、エジプトに対する神の裁きの預言、カルケミシュの戦いの年でもあります。この時に、エレミヤ書 32 章に詳しく書かれているように、主がバルクに対して、エレミヤの預言を口述するように命じられるのです。

このカルケミシュの戦いがどんな意味を持っているのか、どうしてこれだけ大きな出来事であるのかを考えてみたいと思います。この時以来、イスラエルとその周辺地域に勢力を持つ大国が、エジプトからバビロンに移ったということでもあります。カルケミシュの戦いからしばらくして、このような状態になりました。「2列王 24:7 エジプトの王は自分の国から再び出て来ることがなかった。バビロンの王が、エジプト川からユーフラテス川に至るまで、エジプトの王に属していた全領土を占領していたからである。」かつて主がアブラハムに、ユーフラテス川からエジプトの川まであなたに与えると言われたその土地が、今やバビロンの占領下に入ったということです。

カルケミシュの戦いは、アッシリヤの残党がユーフラテス川の上流、今のトルコとシリアの国境にあるカルケミシュという町に逃げたことによります。ニネベが 612 年にバビロンによって陥落しました。そして残った者たちがカルケミシュにアッシリヤの遷都をしました。その残党にバビロンが攻めたのです。エジプトは、バビロンの勢力が拡大するのを恐れてそれで北に遠征しました。ところがユダの王ヨシヤが戦いを挑み、それでメギドで戦い、ヨシヤは倒れてしまいました。それが紀元前 609 年のことです。その後、ユダはエホアハズを王に立てますが、エジプトはすぐに追放して、彼をエジプトに捕え移し、エホヤキムを傀儡の王にしたのです。けれども、このカルケミシュの戦いが 605 年に起こり、パロ・ネコはネブカデネザルの前で倒れ、エジプト軍は、一目散に逃げます。

そしてネブカデネザルは、自分が支配したことを示すためにエルサレムに来て、王族の一部を捕え移します。それがダニエルや友人三人を含む者たちです。第一次バビロン捕囚です(ダニエル 1:1-3)。この時、バビロンの王ナボポラツサルが死に、急遽、息子ネブカデネザルが王となりました。これでユーフラテス川からエジプト川までの全領域が、ネブカデネザルによってバビロンの支配領域となったのです。これはまた、ダニエル書によれば異邦人による帝国がこの地域を支配する異邦人の時の始まりでもあります。ダニエル書は、1 章はヘブル語で書かれていますが、2 章の途中からアラム語、当時の世界貿易用語に変わります。つまり、神の救いの働きはイスラエルということには変わらないのですが、それでも彼らが虐げられ、踏みにじられるという長い期間の始まりとなりました。ユダによって自分たちの信仰が最も試された時期に入ったと言えるのです。

ですから主は、バルクに対してエレミヤの預言を書き残すように命じられたのです。彼らの不真実によって、神が不在であるかのように見える時代に入ります。しかし、バビロンではダニエルに

よってそれでもイスラエルの神が天の神であり、この方が王を立て、王を倒されることを証しされました。そしてユダの地域では、エレミヤによって確かに神は、エルサレムをバビロンによって滅ぼされるに任せられることによって、ご自分の真実を正しい裁きによって示されたのです。神は、私たちにとっては生きておられないように見えるような時期があります。しかし、神の言葉によって、そこにも神はおられるのだということを知ることができます。

そしてエレミヤの預言が書き残されたことによって、七十年後のエルサレム帰還にも大きな影響を与えます。ダニエルがエレミヤの預言を読んで、間もなくバビロンから同胞の民がエルサレムに戻ることを知ったのです。それで祈りを捧げ、エズラ記に見られるエルサレム帰還のための祈りを捧げることができました。そこで諸国への裁きの預言に入っていきます。

3A エジプトへの復讐 46

1B 敗走する軍隊 1-12

46:1 諸国の民について、預言者エレミヤにあった主のことば。46:2 エジプトについて、すなわちユーフラテス河畔のカルケミシュにいたエジプトの王パロ・ネコの軍勢について。ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第四年に、バビロンの王ネブカデレザルはこれを打ち破った。

これまで主は、ユダに対して語っておられました。ユダはご自分が契約を結ばれた民です。けれども、主は全ての民に対してノアを通して契約を結ばれていました。それぞれに光が与えられており、周囲の国々はイスラエルを通して光が与えられていました。このカルケミシュの戦い、つまりバビロンがその地域一帯を支配することによって、ユダのみならず周囲の国々にもご自分の正しさと裁きを示されるのです。その筆頭が、大国エジプトに対するものであります。

46:3 「盾と大盾を整えて、戦いに向かえ。46:4 騎兵よ。馬に鞍をつけて乗れ。かぶとを着けて部署につけ。槍をみがき、よろいを着よ。46:5 何ということか、この有様。彼らはおののき、うしろに退く。勇士たちは打たれ、うしろも振り向かずに逃げ去った。恐れが回りにある。…主の御告げ。…46:6 足の速い者も逃げるができない。勇士たちものがれるができない。北のほう、ユーフラテス川のほとりで、彼らはずまず倒れた。

エジプトが自分たちの軍隊や武器を誇って、勇ましくバビロンとの戦いに臨んでいることを皮肉を込めて語っておられます。そこまで誇っていた肉の武器を主は無き物にし、彼らをつまずせます。

46:7 ナイル川のようにわき上がり、川々のように寄せては返すこの者はだれか。46:8 エジプトだ。…ナイル川のようにわき上がり、川々のように寄せては返す。彼は言った。『わき上がって地をおおい、町も住民も滅ぼしてしまおう。』46:9 馬よ、上れ。戦車よ、走れ。勇士たちよ、出陣だ。盾を取るクシュ人、プテ人、弓を引き張るルデ人よ。46:10 その日は、万軍の神、主の日、仇に復讐する復讐の日。剣は食らって飽き、彼らの血に酔う。北の地、ユーフラテス川のほとりでは、万軍

の神、主に、いけにえがささげられる。

彼らがエジプトから一気に、ユーフラテス川上流のカルケミシュに向かっていくけれども、一気にエジプトに敗退していく様を、ナイル川の氾濫に喩えています。ナイルはエジプトの誇りであり、実に神として祭られていました。エジプトの力はナイルそのものです。ところが、ナイルの勢いが一時的であるように、彼らの地下からも同じであることを教えています。そしてエジプトは、傭兵を持っていました。外国人を雇って戦わせていました。クシュ人はエチオピア人のことです。プテ人はリビヤ人のことです。こうやって外国の民を自分のものとしていることも誇っていました。これらも意味のないものにされます。

私たちは、エジプトについてイスラエルが誘惑になっていた、なぜならそこに豊かさを知恵、また馬に代表される力があるからだと学びました。神の民にとってまさしく「世」そのものであります。その中心的な馬について、また外国の民を傭兵にする豊かさについて神があざけておられるのです。彼らの拠り頼む者が実はこれほど空しく、弱々しいものであったかを示しています。ダビデが詩篇で歌いました。「20:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。」

そして主は、彼らがユーフラテス河畔で倒れ、血を流すのを、「いけにえ」として喩えられています。まるで祭壇の上で動物の生贄を捧げ、血を流すかのように、彼らの死や流血には神の明らかに御心があるということです。それは「復讐」であると言います。何をもって復讐なのでしょう？これは、神を神としないところにある反抗でありましょう。全ての知恵、力が天地創造の神から来ていることを認めないで、自分自身を誇ることを打ちのめす裁きであります。もう一つは、イスラエルに対する感わしや虐げも含まれていたかもしれません。契約の民に神以外のものに拠り頼ませる誘惑を作った、またユダの国を支配下において蹂躪したということも含まれているかもしれません。

46:11 おとめエジプトの娘よ。ギルアデに上って乳香を取れ。多くの薬を使ってもむなしい。あなたはいやされない。46:12 国々は、あなたの恥を聞いた。あなたの哀れな叫び声は地に満ちた。勇士は勇士につまずき、共に倒れたからだ。」

「ギルアデ」は、ヨルダン川東岸のヨルダン川沿いの地域です。そこに医療に使われる乳香があります。それをもっても癒されない、ということですが、主の懲らしめには癒されないのと、癒されるものの二つがあります。癒されないのは、刑罰であります。癒されるのは、教育であり訓練、躰であります。神との契約のある民は同じ災いであっても、それは癒されるために益として働きます。契約が無ければ、災いが災いとなり、悲しみの中で滅ぶしかありません。これが、信仰を持っている者と持っていない者の違い、癒されるための災いかそうでないかの分け目になります。そして12節に、エジプトが辱めを国々の間で受けることがあります。大国を誇っていたその地域が落ちるからです。これ以降、エジプトは大国としての地域を取り戻すことはできなくなります。

2B 侵略するバビロン 13-24

46:13 バビロンの王ネブカデレザルが来て、エジプトの国を打つことについて、主が預言者エレミヤに語られたみことば。46:14 エジプトで告げ、ミグドルで聞かせ、ノフとタフパヌヘスで聞かせて言え。「立ち上がって備えをせよ。剣があなたの回りを食い尽くしたからだ。46:15 なぜ、あなたの雄牛は押し流されたのか。立たなかったのか。主が彼を追い払われたからだ。46:16 多くの者がつまずき、倒れた。彼らは互いに言った。『さあ、私たちの民のところ、生まれ故郷に帰ろう。あのしいたげる者の剣を避けて。』46:17 彼らは、そこで叫んだ。エジプトの王パロは、時期を逸して騒ぐ者。46:18 わたしは生きている。…その名を万軍の主という王の御告げ。…彼は山々の中のタボルのように、海のほとりのカルメルのように、必ず来る。

12 節までは、エジプトがカルケミシュというユーフラテスの川にまで戦いにいった預言でした。それで敗退したのですが、今読んだところは、反対にバビロンがエジプトにまで攻め入ることの預言です。カルケミシュの戦いはパロ・ネコとネブカデネザルのもので 605 年でしたが、これはパロ・ホフラとネブカデネザルの戦いで、567 年のことです。

場所が「ミグドル」そして「ノフとタフパヌヘス」です。ですから、先にユダヤ人たちが寄留していたところと重なります。パロのことを「雄牛」と呼んでいます。後で 20 節、「かわいい雌の子牛」と呼んでいます。つまり自分は雄牛のように横暴で、暴虐を振っています。実はそれだけ弱いということです。そしてネブカデネザルによって追い払われているのは紛れもなく、主ご自身がしておられることを強調しています。16 節の「生まれ故郷に帰ろう」と言っているのは、先ほど出てきた傭兵たちです。自分の誇りにしていた外国人の兵士たちは、このようにして故郷に逃げていってしまいます。そして、「時期を逸して騒ぐ者」です。これは心に響きます。彼は、もう既にエジプトの栄光と力が過ぎ去った時に、それでもかつてのように力があると思って動いています。哀れです。

そして主がこのことが必ず来ることを、タボルとカルメルに喩えておられます。タボル山はイスラエル平野の東にある山で、カルメル山は西の地中海沿いにある高い山です。つまり、おそらくは、その高い二つの山とその間にある平野に軍隊が群れをなして南下している姿を描いているのでないでしょうか。

46:19 エジプトに住む娘よ。捕虜になる身支度をせよ。ノフは荒れ果て、廃墟となって住む人もなくなるからだ。46:20 エジプトはかわいい雌の子牛。北からあぶが襲って来る。46:21 その中にいた傭兵も、肥えた子牛のようだった。彼らもまた、背を向けて共に逃げ、立ち止まろうともしなかった。彼らの滅びの日、刑罰の時が、彼らの上に来たからだ。46:22 彼女の声は蛇のように消え去る。彼らは軍勢を率いて来る。きこりのように、斧を持ってはいって来る。46:23 彼らはその森を切り倒す。…主の御告げ。…それは測り知られず、いなごより多くて数えることができないからだ。46:24 娘エジプトは、はずかしめられ、北の民の手に渡された。」

568年にエルサレムでバビロンが人々を捕虜にしたのと同じように、567年にはエジプト人もバビロンは捕え移していきます。その様子は、虻が雌の子牛、また肥えた子牛に群がるように襲ってくるのと似ています。そして蛇のような、かすかな声として彼らの叫び声は消え去ってしまいます。それからバビロンの軍勢が蝗より数が多いという恐ろしい数でやって来ます。しかも斧を持っており、森を切り倒すとあります。これは比喻でしょうか、ゆまりエジプトの美しさや光栄となるものを、彼らの武器で物の見事に倒していくということです。そして最後に、エジプトがバビロンに倒れることを、強姦を受けた女に喩えておられます。

3B 捕囚からの救い 25-28

46:25 イスラエルの神、万軍の主は、仰せられる。「見よ。わたしは、ノのアモンと、パロとエジプト、その神々と王たち、パロと彼に拠り頼む者たちとを罰する。46:26 わたしは彼らを、そのいのちをねらっている者たちの手、すなわちバビロンの王ネブカデレザルの手とその家来たちの手に渡す。その後、エジプトは、昔の日のように人が住むようになる。…主の御告げ。…

「ノのアモン」とあります。「ノ」は古代エジプトのテーベのことです。そして「アモン」は、ラーと並ぶエジプトの太陽神のことです。43章でタフパヌヘスにネブカデネザルが侵攻してくる預言がありましたが、そこにも「エジプトの国にある太陽の宮の柱を砕き、エジプトの神々の宮を火で焼こう。(13節)」とありました。エジプトにおいての誇りは、これらの神々でした。神殿礼拝と祭司の集団は絶大な権力をふるっていました。かつて主は、直接、パロに災いを下して、エジプトで神々としてあがめられていたものに裁きを下されましたが、ここではバビロンをとおして裁かれます。

ですから、エジプトはこの世を表していると言いましたが、力や豊かさの加えて、神々があるでしょう。私たちがまことの神、主をあがめない時、この方に仕えるのを拒み、力や豊かさによりに頼むのであれば必ず、心では神以外の他の偶像を拝んでいます。自分に仕えてくれるもの、自分を虜にして、情熱を傾けられるものを拝み、仕えます。ある人にとってはそれが快樂かもしれないし、またある人にとっては知識かもしれない、また影響力や権力を持ちたいと思うかもしれないし、また金銭欲や情欲もあるでしょう。エジプトはこうした神々を代表するものがあり、それが世の制度を表していました。それに対して神は刑罰を加えられます。

そして最後に、「昔の日のように人が住むようになる。」と主は加えておられます。エジプトに人がまた住むことについては、エゼキエル書にも書かれています。そして次、エジプトへの刑罰を神が宣告された後に、ご自分の民イスラエルを励まし、慰められるのです。

46:27 わたしのしもべヤコブよ。恐れるな。イスラエルよ。おののくな。見よ。わたしが、あなたを遠くから、あなたの子孫を捕囚の地から、救うからだ。ヤコブは帰って来て、平穩に安らかに生き、おびえさせる者はだれもない。46:28 わたしのしもべヤコブよ。恐れるな。…主の御告げ。…わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは、あなたを追いやった先のすべての国々を滅ぼし尽くす

からだ。わたしはあなたを滅ぼし尽くさない。公義によって、あなたを懲らしめ、あなたを罰せずにおくことは決してないが。」

エジプトに対して神が下された裁きがあります。その裁きをもって、イスラエルの民も恐れ、おののいてしまいます。今、バビロンに捕え移されているのですが、その苛酷な異教の地、また奴隷としての身分で生きていますが、エルサレムが破壊された時のことを身をもって知っていますから、恐れたのです。また同じようにバビロンは自分を滅ぼすのではないかと恐れたのです。しかし、主は、「わたしのしもべヤコブよ。」と二度も呼びかけておられます。神のエジプトに対する取り扱いと、あなたとは異なるのだ、恐れるな、と神は慰めておられるのです。これは、キリストによってアブラハムの子孫にいただいた私たちも同じです。たとえどんな苛酷な状況があっても、そしてその苛酷な状況が自分の罪のゆえに神の懲らしめの結果であっても、それでも主の貴方への愛は変わらず、必ず救ってくださいます。

主は彼らを、「しもべ」と呼んでおられます。大事な二つの要素があります。一つは「ご利益ではない」ということです。自分にとって益になるかどうかではなくて、「言われたから」というただその理由だけで従うのです。先ほどの天の女王を拝んでいたユダヤ人の姿勢とは正反対です。条件付ではないのです。自分の知性で理解できなくとも、感情が許さなくとも従います。そしてもう一つは、ゆえに「主がすべての責任を取ってください」ということです。主人と僕の関係において、僕はただ忠実に仕えればよいのであり、事は主人がすべて行なっているものです。自分のものは何もないと同時に、自分は主人に関わるあらゆるものの中にいます。ですから、心配する必要はありません。すべて主がしてくださいますので。そして自分のものでないのだから、任せればよいのです。

そして、「救うからだ」と約束しておられます。先に話しましたように、エルサレムに残されていた民は、エジプトに動くことによって自分を救おうとしました。けれども、バラクに対して神が語られたのと同じく、主との関係の中に救いがあります。主が自分の主となっていること、これさえあれば、どこに行っても救われます。そしてネブカデネザルという横暴な君主の下にいても、救われるのです。536年には人々はエルサレムに帰還します。そして516年に神殿を再建します。それから、次の約束は、「わたしがあなたとともにいる」であります。天地万物の造り主が共におられます。私たちは何かをした、何かをしなかったという尺度で物事の上出来を測りますが、そうではなく、ただ主が共におられるという臨在が大事なのです。そして、主はバビロンを必ず打ち倒されます。

そしてヤコブに対する懲らしめと、バビロンに対する滅亡との違いをはっきりさせます。これが、私たちキリスト者に対する神の取り扱いでもあるのです。「1コリント 11:32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。」主は愛しておられます。ゆえに懲らしめることもあります。そして、それは私たちが罪から離れるためのものであり、聖めのためのものです。主は共におられます。ですから、恐れる必要はなく、命を救ってください、永遠の命へと至らしめてくださいます。